

2009年9月10日から19日まで、ロシアに滞在した。今回は、私にとっては初めてのロシア訪問であった。ロシア研究者と共に訪問する機会が与えられたことは、私にとっては幸運であったと思う。このような機会が与えられなければ、積極的にロシア訪問を考えることはなかっただろう。はじめての国というものは、実に多様なインスピレーションをもたらしてくれる。自らのフィールドであるインドと比較しつつ、思いがけない方向に想像力をかきたててくれた。10日間という短期の滞在で訪問場所も限定されていたため、偏見に満ちた感想を抱いただけなのかもしれないと思いつつ、率直な想像力の所産を雑感という形でここに記しておこう。

1. 食文化に思う

「異文化体験は食文化に始まり食文化に終わる」としばしば感じる。特に短期の滞在では、舌の感覚だけが忘れ難くいつまでもまとわりつくものである。10年以上も前にヨーロッパ各地を旅した時も、訪問した観光地などは記憶の底に沈んでしまったのに、食の体験だけは、食べたレストランや食べ物を買った店の詳細まで含めて、今でも鮮明に思い出す。初めてのロシアもまた、舌の思い出が強烈だった。

インドは、独立後、社会主義的な経済政策をとり、ソ連とは経済的・政治的な側面のみならず、文化的にも深い友好関係によって結ばれていた。しかし、ソ連崩壊後、その関係は急速に薄れていったように思われる。それでもなお、今日のロシアにはその痕跡が十分に残されているに違いないと、訪問する直前までは漫然と考えていた。なぜならば、南アジア系移民は、華僑と同様に全世界に広がって各地でコミュニティを形成しているからである。西欧諸国やアジア諸国を訪問すると、街角で南アジア系らしき人々の姿やインド料理屋の看板を目にすることも決して珍しくはない。

ところが、そのような事前の予想に反して、ロシアで訪問した各都市の街角で目立っていたのは、インド料理屋の看板よりは日本料理屋の看板だった。ロシア料理は、素材は豊富だが香辛料の刺激はほとんどない。カザンの市場には多様な香辛料を並べた店が何軒もあったのに、いったいどこで誰がこれ



スパイス専門店、カザンの市場

らの香辛料を使用しているのだろうか。ムスリムたちが使用しているのだろうか。ロシア人の日常の食卓には、香辛料をふんだんに用いた料理が並ぶことはないのだろうか。モスクワのハレー・クリシュナ(クリシュナ意識国際協会)の信徒たちはロシア人ばかりで、寺院内で売られているサモサーも、信徒が寺院近くのショッピングモールに出店している



ISKCONの経営するインド料理屋、モスクワ

インド料理屋のカレーも、ピロシキやボルシチと似たような味がした。色は黄色いが唐辛子のような辛味のあるスパイス類はほとんど使用されていなかった。彼らは菜食主義をしっかりと受容しているにもかかわらず、その味は受容しなかったというわけなのだろう。彼らが聖地インドを訪問するチャンスを得たとしても、きっと食生活に困るのではないか、といらぬ心配をしてしまうのである。

2. ロシアの街の景観

ロシアの街を歩いていて最も目についたのは、歴史的英雄たちの銅像や記念碑の多さとその立派さだった。もちろん、インドの街角にも地元有力者の銅像などあるにはあるが、さほど立派でもなければ大きくもない。雑踏にまみれて気づかないことも多いし、人々もさして気にする様子もない。ましてや、観光ガイドがいちいち銅像の前で立ち止まって、その人物について延々と説明するようなことなどないに等しい。それよりも目につくのは寺院の多さであり、ヒンドゥーの神々の像の多さである。

確かにロシアでも、正教会の多さは予想以上であった。しかし同時に、銅像や記念碑は街中で最も目立つ場所を占拠していた。しかも、どれもマッチョな男性ばかりだった。このような男性性を誇示した銅像が必要とされるのはなぜなのだろう。インドのナショナリズムがしばしば母性によって表現されたのとは逆に、男性性の誇示によって内向きのナショナル・アイデンティティを固めようとしているかにみえる。欧米の大国への対抗意識の表れなのか。それともソ連時代にロシア正教が長く弾圧された名残なのか。

ロシア正教のイコンには母性を象徴するマリアの姿がひととき目に付く。そういえば、正教会の建築に特徴的なねぎ坊主(ドーム型屋根)は、インドを専門とする私にとっては、むしろイスラーム建築の特徴の筆頭に挙げられるものである。もちろん、ドーム自体はイスラーム以前の古代オリエント世界にさかのぼり、ビザンツ様式の特徴でもあるから、ロシア正教会の建築様式はビザンツ様式を直接受け継いだものと理解すべきだろう。しかし、インドにドームやアーチの建築技法を伝えたのは、ペルシア・西アジアからインド亜大陸

に侵入したムスリムだった。私にとってドーム型屋根は、ヨーロッパ世界よりはむしろ『千夜一夜物語』的な世界、ムスリム宮廷のハーレム文化を思い起こさせるものである。ロシア正教会の丸いねぎ坊主は、イコンに描かれたマリアと共に母性あるいは女性性への想像力を掻き立てる。それは、街を占拠するマッチョな銅像と明確なコントラストをなして、私の目に焼きついた。

最もショックを受けたのは、ニジニ・ノヴゴロドのガイドに案内されたアフガン戦争で没した兵士の碑だった。私がインドに留学していた80年代中葉、ソ連のアフガン侵攻(79年)に伴うアフガニスタン問題は混迷を極め、多数の難民がインドにも流れてきていた。私は留学中、そんなアフガン難民の家族と出会った。彼らは難民認定を受けて定住を許可され、月1000ルピー(当時は1ルピー10円程度)の援助を受けてニューデリーの古びたアパートの一室に暮らしていた。入り口のドアには反ソのスローガンを書いた大きな紙が貼ってあったのを記憶している。私はベトナム難民の家族とも付き合いがあったのだが、様々な地域から多くの難民を受け入れているインドは、日本に比べて圧倒的に包容力が違うなあと感じたものだった。

ところがロシアでは、アフガン戦争の兵士たちは祖国の英雄として称えられ、ガイドがその功績を滔々と語るのである。冷戦という戦争当時の背景を鑑みれば、長期にわたってアフガニスタンが米ソ超大国の思惑に翻弄されてきたことは否定できない。インドに流れ着いた難民をはじめ、祖国を失い、命を落としたアフガニスタンのごく普通の民衆の日常生活とはかけ離れたところで、問題は拡大していったのである。私は複雑な思いにとらわれると同時に、どうしても不快感を覚えずにはいられなかった。

3. モスクワの都市問題

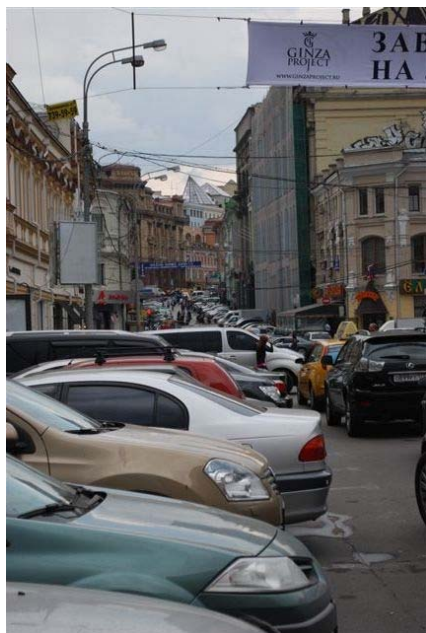
私の中のモスクワは芸術の都だった。行く前から期待していたボリショイ劇場が工事中だったことは本当に残念でならない。工事中の様子を隠すために、実物大の劇場の姿が描かれた巨大な幕が張られていたのはご愛嬌だった。このような幕は、やはり工事中の主要な建物にも張られていた。他ではあまり見かけない趣味である。その代わりに、地下道でクラシック音楽を演奏するストリート・ミュージシャンやロシア正教会の美しいコーラスは、本当に心を和ませてくれるものだった。やっぱり芸術の都だった。



ストリート・ミュージシャン、モスクワ

ところで、モスクワで一番驚いたのは、なんといっても激しい渋滞だった。かつては二重駐車当たり前で非難の的だった大阪よりもひどい。道路の両側にずらっと車が止めら

れており、本来ならば片側二車線も可能であろうかと思える道路は、中央にやっと車が一台通れるようなスペースがあるだけ。インドの大都市も相当な渋滞だが、渋滞の質が違う。かつてのムガル帝国の首都デリーで渋滞が最もひどいのは、デリー城正面の目抜き通りにあたるチャンドニー・チョウクだろう。この場合、車や自転車や人や牛などがいっせいに押し寄せるから渋滞するのだが、モスクワの場合、道路が駐車場状態になるから渋滞するのである。デリーとモスクワでは渋滞の質が異なるとはいえ、いずれも都市中間層の台頭とグローバル化のひずみであることに変わりはなく、早急に解決しなければならない大問題である。



道路を占拠する車、モスクワ

ソ連崩壊後、ロシアもグローバル化の波に巻き込まれ、急激な社会変化のなかで格差は著しく拡大しただろう。モスクワのような大都市には、インドと同様にきっと職を失い家を失った人々が路上にあふれ、スラムを形成しているに違いないと想像していた。屋根があつて雨や寒さもしのげる地下鉄の駅など、路上生活者にとっては絶好の住処である。ところが、予想に反して物乞いは少ないし、スラムはないし、路上生活者もほとんど見当たらない。かといって、政府が彼らを手厚く保護しているとはとても思えない。彼らはいったいどこに行ってしまった

のだろうか。不思議に思って同行のロシア研究者に尋ねてみると、少し前まではモスクワにも路上生活者がたくさんいて、中でも年寄りが特に多かったという。しかし、数年前にモスクワを襲った大寒波によって彼らは命を落としてしまったのだという。インドの多くの地域は暑くて大寒波はないが、デリー近辺では冬の夜中の気温が10度以下に下がることもあり、寒さで命を落とす路上生活者も存在する。それを考えると、モスクワの大寒波など私の想像の及ばない世界だ。

ロシア滞在の最終日、モスクワの街には冷たい雨が降り、寒いのが苦手な私は、しっかりカゼをひいて帰国することになった。

ロシア滞在の最終日、モスクワの街には冷たい雨が降り、寒いのが苦手な私は、しっかりカゼをひいて帰国することになった。

4. オタク文化のグローバル化

ロシア国立人文大学の女子学生は、英語が堪能な18歳の日本大好き少女だった。日本語を習い始めてまだ2週間だというのに、妙に発音がいい。彼女は日本のアニメやドラマ、ヴィジュアル系バンドにハマっているのである。一番好きなアニメは『NARUTO』、お気に入りのドラマは『花ざかりの君たちへ〜イケメン♂パラダイス』だという。ロシア国内で日本のアニメは普通にテレビ放映されているのだが、彼女はわざわざインターネットでダ

ウンロードして見るという。ロシア語の吹き替えではなく日本語で楽しみたいからなのだろう。どおりで発音がいいはずである。彼女の iPod には J-POP と J-ROCK だけが入っていて、ロシア語の歌も英語の歌も入っていなかった。ノートには日本のマンガやアニメのキャラクターを真似た絵が大量に描かれていて、それを自慢げに見せてくれた。ロシア各地では、しばしばコスプレをしたアニメ・ファンたちが集まる大規模な集会在催されていて、彼女もそうした集会に参加するのが楽しみだという。剣道着を持っているので、次の集会には死神のコスプレ(おそらくアニメ『BLEACH』のことだろう)で参加するのだと言っていた。我々が帰国する日、サンクトペテルブルクに次いでモスクワで、日本のヴィジュアル系バンド MIYABI のライブがあるが、彼女はチケット争奪戦に出遅れてチケットをとり損ねたと、がっかりした様子で話していた。

いわゆる日本の「オタク文化」が世界を席捲していることは、近年、日本のマスメディアでも話題になっている。とはいえ、私は、「オタク文化」の世界的な広がりとは、おそらく欧米と東アジア諸国に限定された話だろうと思っていた。まさかロシアにもこれほどまで浸透しているとは想像もしていなかった。今日、こうした情報はネットを通じて容易に共有される。そのスピードは我々の想像をはるかに超えたものなのである。とはいえ、現実的にはホテルやネットカフェのネット環境は極めて悪く、値段も高く、ほとんどメールの送受信ができないままに日々が過ぎていった。都市部のネット環境はインドの方がずっとましである。

5. ロシアのハレー・クリシュナ

最後に、「ハレー・クリシュナ」というマントラを唱えながら歌い踊ることや、アメリカのカウンター・カルチャーのなかで若者たちの熱狂的な支持を受けたことで世界的にも有名なヒンドゥー教系の新興宗教集団、クリシュナ意識国際協会(International Society for Krishna Consciousness 以下 ISKCON)のロシアでの活動について取り上げよう。



歌い踊る ISKCON の信徒、ウラジーミル

ウラジーミル大学で宗教学を講じるチモシューク氏は、ISKCON の信徒でもある。ウラジーミルにある ISKCON の寺院は役所の建物を利用した質素なものだった。室内にはクリシュナ神とその恋人ラーダーの像が飾られ、男女数人の信徒たちが集まって、クリシュナを讃えるバジャン(宗教歌)をインド楽器の伴奏で歌い踊ってくれた。彼らの歌はヒンディー語で、インド人が演奏するのとはほとんど同じスタイルだった。

ウラジーミルの信徒数は 50 人ほどだが、興味をもっている人は 100 人ぐらい、年一度のク

リシュナ生誕祭(ラタ・ヤートラ 山車祭)には 2000 人以上の人々が集まるという。

モスクワにはロシア最大の ISKCON の寺院があり、信徒の数は 2 万人にのぼるといふ。モスクワ人文大の女子学生がそこに案内してくれた。ロシア最大の寺院というから、インドの寺院をそのまま再現したような立派な寺院建築を期待した。ところが、ほとんど平屋のプレハブとあってよい質素な建物で、想像したような壮麗な寺院とは程遠いものだった。実は、どちらかといえば外観的にはロシア正教会に似て、ねぎ坊主のたくさんついた立派な寺院を建築する計画はずいぶん前から存在していた。ところが、寺院の建設用地にはショッピングモールを作る計画があって、建築申請を提出しても許可がおりないのだという。そのため、今日まで仮住まいのプレハブなのである。ロシア政府当局は、ロシア正教の力を利用しながらも、宗教の力そのものに対してはいまだに恐れを抱いているのではないだろうか。意図的な建築の妨害も十分にありうる話である。



バクティヴェーダーンタ像の前で歌う信徒、モスクワ

さて、ISKCON は、カルカッタ生まれの聖者バクティヴェーダーンタ・スワミー・プラブパーダによって設立された。その教義は、15~16 世紀にベンガル地方で活躍した聖者チャイタニヤの教えを範とする。チャイタニヤはクリシュナを最高神とし、自らをクリシュナの恋人とみなし、クリシュナを熱狂的に愛し讃える歌を数多く作り、歌い踊りトランスに至ってクリシュナとの聖なる合一を体験するという民衆的なバクティ(信愛)運動を開始、カーストなどの分け隔てなく入信を許可した。彼の活動を通じて北インド一帯にクリシュナ信仰が拡大し、信者のすそ野は著しく拡大した。ISKCON の歌や踊り、誰にでも入信を許す姿勢は、まさにチャイタニヤの運動を今日に再現するものである。

バクティヴェーダーンタは、クリシュナの聖地ヴリンダーバンの聖者バクティシッターンタの下で修行をつんだのち、1966 年、世界布教のためにアメリカをめざし、ニューヨークに小さな寺院を開いた。そして、60 年代アメリカのカウンター・カルチャーのうねりのなかで若者に熱狂的に受け入れられ、イギリスではビートルズのジョージ・ハリスンらの支援も受けた。

はじめてロシアに ISKCON が伝えられたのは、1971 年、ソ連時代のことであった。バクティヴェーダーンタのアメリカ人一番弟子、シャームスダルはソ連布教をめざしてモスクワにやってきたが、到着してから 3 日間、ホテルから一歩も外にでることができなかったという。ISKCON の信徒は菜食主義なので、彼は、3 日目になって食事の材料を調達するためにようやく外出することができた。すると人々は、彼がアメリカ人だとみて「ジ

ーンズ売ってくれ」と寄ってきたという。本格的な布教が開始されたのは、やはりアメリカ人の弟子アナンタ・シャンティダースが、モスクワにインド人協会を設立してヨーガを教え始めてからである。共産党政権下のソ連では、西側の情報流入が厳しく制限されていた。実は、彼は空港に聖典『バガヴァッド・ギーター』を置き忘れてきてしまった。ところが、聖典の内容は誰にも理解できないものだったため、検閲を逃れることができた。彼はこの聖典のロシア語版を出版、こうして徐々に ISKCON の教義は広まっていったという。

ロシアの ISKCON は小規模な新興宗教団体とみなされていることだろう。モスクワの寺院にはインド系の人々の姿はなかった。インド国内のみならず、欧米各国に多数存在する ISKCON の寺院が在外インド人をも集めているのとは大きな違いである。ロシアの ISKCON は前途多難に思えた。私にとって、日本やインド、欧米ではこの種の新興宗教団体の調査はやりにくい。どうしても周囲の目を気にしてしまう。ロシアははじめての国で親しい友人がいるわけではないので、かえって気楽に話を聞くことができた。これは私にとって幸運だったといえるかもしれない。